



2006 年 (平成 18 年)
10 月号 (No. 737)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

日本山岳会と私の登山④

多様なヒマラヤ登山が存在した時代…………… 1

日本山岳会100年の先達…………… 4

東西南北…………… 6

グリフィスによる白山の高度測定について
寺田寅彦とウェストン
ウェストンと明治25年の日光
支部だより…………… 8

北海道／熊本
活動報告…………… 10

広報委員会／海外委員会／学
生部指導委員会／医療委員会
／新土曜会

Climbing & Medicine・57…………… 13

『日本山岳会百年史』の配布に
ついて…………… 13

図書紹介…………… 14

図書受入報告…………… 15

会務報告…………… 16

ルーム日誌…………… 17

INFORMATION…………… 18

新入会員…………… 18

さんけん通信…………… 19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時

日本山岳会と私の登山④

多様なヒマラヤ登山が存在した時代

山本宗彦

70年代以降80年代にかけて、日本山岳会のヒマラヤ登山は、高い目標をかかげながら、多くの若い登山家を育ててきた。第4回目は、鹿野、重廣両氏の薫陶を受けた山本宗彦氏に、学生部のボゴダからカンチェンジュンガ縦走まで、当時の登山界と日本山岳会の役割も含め、綴ってもらった。

80年代初めから90年代半ば

私の日本山岳会における高所登山はごく限られた時期のわずかな経験でしかないが、私自身はヒマラヤ登山隊のなかで日本山岳会の隊に最も多く参加してきた。80年代初めから90年代半ばまで、そのころはさまざまな高所登山が何回

も実践されたところであり、高所登山が山岳会の活性化にも大きな役割を果たしていたような時期であった。

私が日本山岳会の高所登山に参加したのは、学生部による1982年のボゴダII峰が最初で、山岳会への入会もその時になる。当時

を振り返ってみると、そのきっかけは偶然だったとしても、その背景には日本山岳会がそれまでの海外登山の実践を基にして、会としてそれらをさらに幅広くレベルアップしていこうとしていた時期であったと思う。

私がヒマラヤでの高所登山を始めた時期は、組織的に大人数で登る方法が多かった時代だった。この包囲法は、ある意味では前時代的と言われても仕方がないものの、高所登山を始めたいばかりの人間にとってどれだけ大きな意味を持つかということをもう一度検証する必要があるだろう。私にとって大変有効に作用した日本山岳会の会としての考え方や活動状況は、今振り返るとひとつの教育カリキュラムのような機能を果たしていた

ように思える。この点は偶然とはいえ、大変興味深いものがある。

学生部主体のボゴダ登山

私の初めてのヒマラヤの高峰であるボゴダII峰は、学生部主体によるボゴダ5年計画の2年目にあたるもので、5年連続してボゴダ山群に登れる許可を取得したということ自体大変先見性を持ったものであったと思う。これは日本山岳会の特に関心人たちのために許可を取得し、計画そのものは毎年の登山隊に任せるといった大変画期的なもので、現在ほとんどの山岳会で失われつつある教育機能を具現化したものであったと考えられる。

ボゴダ山群の約5000mといふ標高は、ヒマラヤの高峰のなか

ではむしろ低い方になるが、総合的にみてヒマラヤの高峰での経験の浅い者や初心者にとって、経験を蓄積していく場として大変適した山城であったといえるだろう。しかも当時のボゴダ山群は、適度に情報量の少ない山であったことも大変重要な点であったと思う。

さらに私にとって運が良かったことは、経験高度を段階的に高めていくことができたことだ。ボゴダⅡ峰で5362^{メートル}を経験し、翌年、1983年のパミール高原では、7010^{メートル}と7495^{メートル}を経験することができた。

実際の高所登山において、いきなり8000^{メートル}峰へ行くということとは私は少々懐疑的に考えている。高所での生体反応は決して教科書通りではないので、自ら徐々に高度を上げて経験を積んでいくしかないと思うからだ。かりに結果として8000^{メートル}峰を登ることができたとしても、それはきわめて高いリスクを抱えており、チームの構成によっては予想外の重大な事態に対応できない可能性もある。低所から高所へと経験するなかで、自分の体がどうなるかということ、を自ら把握しておくことが重要で

あると同時に、また初めて8000^{メートル}峰のような高峰へ行く場合は、登山隊としての救援能力を持つていることが大事なことだと思える。さらに付け加えれば、いきなり8000^{メートル}峰へ行き、それに成功してしまつと、それよりも低い山々にあまり目を向けなくなる傾向があるようだ。高さは山の重要な要素であるが、それがその山のすべてではないはずである。しかし人間は、たとえば標高という数字のように最も分かりやすい部分だけをみて、多様で複雑な背景や内容に目を背けてしまつという傾向がある。

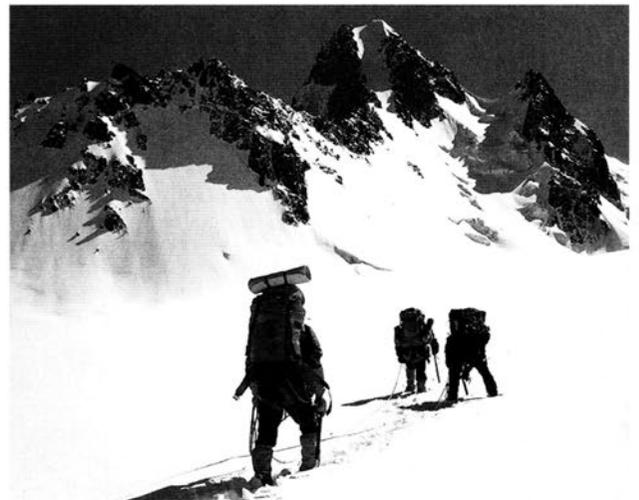
パミール国際キャンプとカンチ縦走

私はボゴダで初めての高所登山を経験した後、続けて日本山岳会のヒマラヤ登山隊に参加する幸運に恵まれたが、それはとりもなおさず日本山岳会内部でも多様な登山を実践できる機運が維持されていたということではないだろうか。1983年の旧ソ連パミール国際キャンプと1984年のカンチエングンジュンガ縦走は、何から何まで大きく異なる登山だった。そうした特徴のまったく違う登山がほと

んど平行して実践されていた事実も、今振り返ると実に貴重なことであつたと思う。パミール国際キャンプは、純粹に高々度における自分の肉体の適応能力を体感するには最適のものだった。このとき登つたレーニンとコミユニズムは、結果的にアルパインスタイルに近いものとなり、レーニンでは5300^{メートル}のC2を

一度往復した後にはC2に泊まり、翌日は7010^{メートル}の頂上を往復し、コミユニズムではBCから往復行動なしで登り続け、6000^{メートル}のC2から一気に7495^{メートル}の頂上を単独で往復することができた。

1983年のパミール国際キャンプは、自分の肉体面における実驗登山のようになつたが、ここで7000^{メートル}台でも自分の体は通用することがわかると同時に、東欧やソ連のクライマーたちのクライミングに触れることができたのは



ボゴダⅡ峰から山群一周の試み。右が東陵の科尔

大きな収穫だった。そして翌年、いよいよ初めての8000^{メートル}峰登山に参加できるチャンスに恵まれた。1984年のカンチエングンガ縦走登山隊に参加した理由はこれが縦走登山だからであり、私自身はまったく高所登山の実績がないにもかかわらず自分が縦走するのだと勝手に思いこんでいた。メンパーへの、「4つの頂上のうちどこに行きたいか」というアンケートにも、私は何のためらいもなく「縦走隊」と書き、「それがダメなら南峰」と書きこんだ。当時、南



カンチ南峰より縦走に挑む。右手主峰の手前が中央峰

峰はまだ一登しかされていなかっただけで、きつとその後もほとんど登られないだろう、人が行かないところがいいという気持ちが強かったように思う。あとで鹿野勝彦隊長から「臆面もなく縦走隊と書いたのは山本だけだ」と言われて、私は逆に「縦走登山隊なのに、なぜ縦走隊を希望しないのだろう」と大変不思議に思ったもの。みんなは縦走したくないのだろうか、それならばなぜこの登山隊に参加したのだろうという気持ちだっ

私は参加が認められた喜びと目の前の役割をこなすことで精一杯で、あとは何も考えられないというのが正直なところだった。それでも私は、大登山隊が初めてであったこともあって、最初から最後まですべてが新鮮な驚きの連続だった。さらに先発隊で最も早く現地入りし、登山終了後も残務処理のため最も遅く帰国したことで約半年近くもネパールに滞在し、二度とできないような貴重な経験をたくさん積むことができた。あのときの経験はその時の時代背景を考えると、おそらくい

らお金を積んでも今では決してできないことだろうと思う。登山において何に価値があるのかという論議はしばしば行なわれることで、ここでは困難性や方法論がどうしても話題の中心になる。それはそれで当然のことかもしれない。そういう点では、このカンチエンジュンガ縦走登山隊は時代遅れの登山隊だと言われたし、その後ソ連隊があつという間に4峰すべてを完全縦走

してしまったことで、事実としてこの登山隊の登山史における位置を決定づけたかもしれない。

しかし、この登山の価値はそういったグローバルな視点からのものだけではないはずで、いわゆる鳥の目から見た価値だけではなく、参加した人間の目、虫の目から見た価値というものもあるはずだ。

私自身はカンチエンジュンガ縦走登山があつたことで、その後の85年のマッシュヤールム北西壁とプロード・ピーク速攻、87年のラカポシ東峰、88年のチョモランマ三国友好登山、95年のマカルー東稜への参加が実現したとも言える。カンチエンジュンガも含めて、その時々で行なわれた大きな高所登山と、その間隙を縫う小さな高所登山の絶妙なコンビネーションが輝いていたところに、日本山岳会の高所登山に関わったことは大変幸運であつたと思う。

ヒマラヤ登山の多様性

私が参加した日本山岳会の登山隊で得た経験から、結局は「誰がなんとやろうと、日本山岳会にしかできない登山を実践する」ということに尽きると思うが、それは

また「その時々々の風潮に惑わされることなく、少人数ではできないような大きな登山を、組織の力で実現させる」ということだろうと思われる。そのなかに、教育機能や救援機能が包括され、大登山隊そのものが高所経験初心者にとつてベテランから学ぶことのできる場ともなるはずだ。

結果的に大登山隊で学べることは、決して高所登山のノウハウや肉体の高所適応能力の確認だけではない。多種多様な生きざまをもつた人々と共に登山をして、彼らの言動を目の当たりにすることによって、驚き、感動し、呆れ、怒りを覚えながら自分の心の中で葛藤し、それらを自分の滋養にしていくことである。さらに自分という人間の枠を破り、厚みを増し、人間のネットワークを広げていくという何ものにも代え難い財産を、若い人たちにもたらすはずである。もちろん、そのために登るわけではなく、それらあくまでも結果的、付随的なものであろう。しかし逆に、そういった機会を結果的にたくさん与えられる登山を作ることも、日本山岳会の役割のひとつではないかと思うのである。

日本山岳会100年の先達

山本健一郎

100周年の式典に出て100年の歴史のうちどのくらいを知っているだろうかと考えてみた。

初めて御茶の水のルームに顔を出したのは、学生の時、1955年ころだから50年前、会の歴史の半分くらいは知っていることになる。その間に多くの先輩にお目にかかる機会があったので、この機会に印象に残る諸先輩の思い出を綴ってみよう。

御茶の水のルームは体協の庭に建てられた山小屋。頭の上でニコライ堂の鐘が鳴り響くので時計を持たない貧乏学生でも時間がわかって便利だった。ときどき横有恒さんがお出でになったが、小柄な横さんが姿を見せるとルームの空気がピンと張り詰めて、居合わせられた方たちが皆緊張して座り直したのを覚えている。穏やかな顔つきで入っていたが、それだけの威厳が備わっていた。しかし何度かお目にかかっていると、横さんは面白い冗談を口にされる親しみやすい方だと分かった。

横さんがマナスル三次隊の隊長を務められたときのこと、横さんは毎晩コップの水に入れ菌をつけてお寝みになっていた。ところがある朝、横さんが入れ菌を嵌められた後に起きてきた某隊員が、そのコップの水を飲んでしまう珍事があつたらしい。横さんの爪の垢なら私も煎じて飲みたいが、入れ菌の垢は御免蒙りたい。しかし、さすが横さんの入れ菌の垢は効き目があつたらしく、お飲みになった方はマナスルの登頂者になったそうである。

松方三郎さんが、チロル帽をかぶり小さいザックを肩に笑顔でルームに現われると、空気が明るく温かくなった。太陽のような方というのが私の印象である。松方さんについては、風雲急を告げる昭和19年に、北京の中央アジア文献専門の古書店で磯野計蔵(磯野文庫の寄贈者)さんとオーレル・スタインの本を探していて鉢合わせされた話が印象に残っている。いつも松方さんが肩にしていた

サブザックは、佐藤久一朗さんが作られたものらしかった。上高地のウエストンのレリーフの作者として知られる佐藤さんは、小振りのシルエットの美しいキスリング・ザックを作られ、藤島敏男さんや深田久弥さんが愛用されていた。私も欲しかったけれど、恐ろしくてそんなことはお願いできなかった。数年前までルームの入口に掲げられていた木製の看板も佐藤さんの作品、雨ざらしにしておくのはもったいないと申し上げたら、大切に保存されることになった。そういえば深田さんの書庫「九上山房」の額も、佐藤さんが書庫の完成を祝って贈られたもの、あれはどうなっているのだろう。

望月達夫さんが名誉会員になられた折、有志の方がお祝いの会を催された。その時記念品として佐藤さん作のプロンズの山靴のモデルが望月さんに贈られた。履き古した、趣きのある山靴が生き生きと描写された佳品であり、拝見して息を飲む思いだった。望月さんはこのモデルとその時のアルバムを大切にいらした。

加藤泰安さんはマナスルに行かれた後、チョゴリザ隊に参加して



志津で、加藤泰安(左)と横有恒さん

ほしいと桑原武夫さんから要請を受け「トシノセヤニドノツトメノヒダリツマ」と受諾の電報を打たれたと聞いて、その人柄に惹かれて。左棲という言葉を知らないと、泰安さんのお相手は勤まらないのだからJACは恐ろしい。

チョゴリザの後、昭和38年5月に月山々麓の志津でヒマラヤ登山の研究会が行なわれ、私も参加した。毎晩、村木潤次郎さん、加藤さん、辰沼廣吉さん、金坂一郎さんたちの司会で氷河の危険、高所順応、装備、8000峰登山のタクティクスなどの討論が進められた。最後の夜は芳野超夫さんが遠征で使う無線機の軽量化、周波数、電源、その他の条件について具体的に参考になる講義をされた。講義の後、村木さんが質問はと言ったら泰安さんがすつくと立ち上がり、「わしゃ無線は好かん。

無線を使うと登山者は馬鹿になる。あんなもん壊れたら焚き付けにもならん。みんな山仲間ならば以心伝心、無線で連絡しあわなくても山に登れる」と喝破された。私は泰安さんの登山哲学に感銘を受けた。素晴らしい講義をされた芳野さんにはお気の毒だったが、この夜の討論はこれで終わり大宴会になった。

もう一人の加藤さん、つまりマナスル登頂者の喜一郎さんにも思ひ出がある。秋の大学祭でマナスルの話をお願いしたら、展示用にマナスルのテントと寝袋をご自分で担いで国立に足を運んで下さった。満員の聴衆を前に熱弁を振るわれ、その後ご案内した雑木林の中の山岳部の山小屋が気に入られたらしい。歓迎会になったらご機嫌の加藤さんは腰を据えてしまった。どうも三田にいる気分になら



五輪尾根で、左から望月、藤島、深田さん

れたらしく、財布から金を取り出し「おい学生、酒を買ってこい」なんて言い始めた。

この晩はすっかり加藤さんのベースで事が進み、マナスルの寝袋に潜り込んだ加藤さんの周りでわれわれも一晩過ごす羽目になった。翌朝も加藤さんはご機嫌で、国立の駅までお送りしたら、あの小屋が気に入ったからまた来ると宣言されたが、残念にも再訪される事なく旅立たれてしまった。

さて藤島さん、深田さん、望月さんの出番が近づいたが、お一人について何ページも必要なので、藤島さんについてさわりだけ書いて終わりにしたい。先年、二火会で村木さんが話をされると聞き、顔を出した。冒頭、村木さんは会の先輩の中では藤島さんに多くの事を教えられ忘れ難いと話され、私だけでなく、村木さんのような大先輩もそう感じていらっしやるのかと印象深かった。

藤島さんはわれわれの山行にもよく参加された。昭和41年5月には中島寛君の肝煎りで、遠見尾根にテントを上げ、小谷部全助さんの活躍を偲び、五竜に登ることになった。晴れ渡った五竜の頂上で、

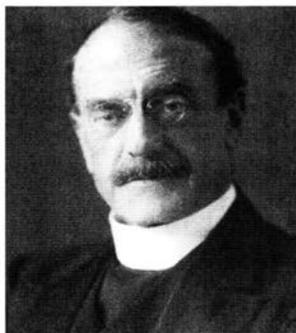
藤島さんに数日前に生まれた私の長男の名前が決まったかと聞かれた。いさか場違いな質問に面食らいながら「武」という漢字を使い、もう一字付け加えたいのですがどう話したら、即座に歴史の「史」を付けたと言われ、五竜の頂上で長男の名前は「武史」に決まった。

藤島さんはこの年9月の北岳行にも参加されたが、大樺沢のテントで明日はバットレスに行くとおっしゃる。肩の小屋から頂上往復と思っていたのでびっくりしたが、泣く子と地頭には勝てない。倉知敬君と若手の間に入っていたとき、高橋信成君と私がすぐ後に続き、5人で第三尾根を登ることにした。藤島さんは大変ご機嫌で秋晴れの頂上に立たれ、ご感想はと火に油を注ぐような質問をした倉知君に「日本の岩場には木や草が生えているね」とひと言おっしゃってニヤリと笑った。藤島さんが70歳の時のことである。

晩年の藤島さんは御殿場の別荘で夏を過ごされていた。暇を持って余しているらしく、やたら手紙と葉書の洪水がわが家を襲ってくる。音を上げてしばらく返事をさぼっていたらまた手紙がきた。開封す

ると「某月某日貴殿に手紙を差し上げたが未だにご返事が無い。いかなる理由か同封の葉書に印を付けてご回答頂きたい」とあり、葉書には、1・私の手紙はつまらなくて返事に値しない。2・私の手紙が届いていない。など思いつく限りの珍妙な理由が書いてある。いくらなんでもこの葉書で返事を出す訳にはいかず、藤島さんのしてやったりという顔を思い浮かべながら、丁重な返事を書いてお出した。この時ばかりは日本山岳会に入ったのを後悔したものである。

もう一度悔しい思いをしたことがある。ある日、神田の悠久堂でこれはという本を見つけ手を伸ばした。ところが頭の上から別の手が伸びこの本をさらっていった。怒り心頭に発した私は、振り向いてこの手の持ち主をにらみつけた。ところがなんとそこには山崎安治さんの笑顔があつて、やあ君かといわれてしまった。こうなると完全に貫禄負け、この本は山崎さんの物となつてしまった。ただ後日、私はこの本を場末の古本屋で、山崎さんが支払われた金額の半分以下で手に入れ、溜飲を下げる事ができた。



英国の宣教師、ウォルター・ウェストン

た。好い心持でした。氷河の向う側はモーヴェ・パーという険路で、高山植物が山の間に花を綴り、ところどころに滝があります。ここから谷へ下る途中に、小さなタヴァンといった様な家の前を通つたら、後から一人追っかけてきて、お前は日本人ではないかと訊きますから、そうだと答えたら、私は英人でウェストンと言うものだが、日本には八年間も居てあらゆる高山へ登り、富士へは六回登つたと話しました。その細君は宿屋の前の草原で靴下を編んでいました」(以下略)

これは新発見ではないかと喜んでいたら、松方三郎さんが昭和12年1月の『会報』63号3頁に「アルプスの廻り合ひ」と題し触れており、その解説も素晴らしい。

その大要は「問題の氷河は明らかにメール・ドウ・グラスで、寺

田さんはモンタンヴェールからドリユーの方へ氷河を横断してアルジャンチェール寄りにシヤモニーの谷に下りたのである。氷河歩きが『好い気持ち』とあるだけで、谷の正面に聳えるジョラスもドリユーも出てこないのが一寸注意をひく。ウェストンが頻りに日本の山への愛着の情を披瀝しても、寺田さんの方は一向に反応がなかったことが文面からも察せられる。ウェストンさんも不満であつたらうが、出会つた人が寺田さんだけに、何となく惜しい気がする」とある。

草原で靴下を編んでいた夫人について松方さんは「英国の上流夫人が貧民病院や孤児院のために編んでいた」のであろう。また目の悪いウェストンに、夫人が「彼処に行くのは日本人じゃないか」といって、ウェストンが押つ取り刃で追いかけたに違いない、と行き届いた解説をしている。

(注) 戦後、岩波版の『寺田寅彦全集』では文学篇第四巻「先生への書簡」に所載。築地書館刊行の松方三郎エッセイ集『山で会つた人』に「ウェストンさんと寺田博士」と題して掲載している。

ウェストンと明治25年の日光

田畑真一

ウェストンをめぐる新発見があつた。明治25年5月、ウェストンらは日光金谷ホテルに宿泊。同ホテル所蔵のレジスタブック(宿帳)により、確認できた。

彼の同ホテルへの宿泊については、明治37年11月の事例が紹介(島田巽ら編「W・ウェストン年譜その2」『山岳』第83年)されている。私はウェストンの著書『極東の遊歩場』(水野勉訳『日本アルプス再訪』)に日光に関する記事が多いことから、彼はさらに同ホテルに宿泊した可能性があるので、と考えていた。

秋山剛康氏(同ホテル社長)が私の考えを受け入れて下さり、同氏にはレジスタブックを調査して下さいというご配慮に浴した。その結果、明治25年5月7日のウェストンら3人の宿泊記録が見つかった。まぎれもない彼の筆跡であり、万年筆で書かれている。「5月7日 ジョン・ウェストン夫人、ミス・コンスタンス・ウェストン、

ウォルター・ウェストン師」(拙訳)

住所は3人とも「神戸」とある。彼の神戸在住時代の居住地だ。なお、同年5月6日、ジョン・ウェストン夫人とその子供が日本郵船の西京丸により、横浜港に着船したとの紹介(島田ら編、前掲文献)がある。これをレジスタブックと照合すると、ジョン・ウェストン夫人らは横浜港に着船後、すぐに日光へ直行したことになり、そこでウェストンらと同ホテルに宿泊したことにもなる。これらの経緯も新たに判明した。

新刊 過酷なグレート・ゲームとは!

大ヒマラヤ探検史

薬師義美 著 インド測量局とその密偵たち

ヨーロッパ列強諸国の中央アジア進出に伴っておきた「グレート・ゲーム」。この時代を背景に、インド測量局の密偵(バンディット)を中心に描く大ヒマラヤ探検の軌跡!

A5判/384頁 定価7140円(本体6800円)

101-0052東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
http://www.hakusuisha.co.jp

白水社

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

北海道支部

第7回自然見学校

今年も猛暑となった日高山脈で8月3～6日、小中学生14名とテント生活をした。ほぼ同数のスタッフとの3泊4日の共同生活で充実した時間を過ごすことができた。7年目にして成功した「火起こし式」が特に印象に残っている。

人類が火を生活に利用した歴史は知っていても、子供たちとそれをなかなか実現できなかった。E.P.ガスに頼り、マッチとライターを使用しての炊事は、どうしても近代的であり、原始性を求めようとスタートした自然見学校では、じっくりしない面もあった。

毎年反省し、カリキュラムを検討しているが、人間の原始への回帰に「火の発見」が重みを占めている。強風で樹木が接触しあい、幹と幹の摩擦で山火事が発生し、

焼死した動物の肉が、生肉より美味と知った原始人の生活への火の利用のストーリーはダイナミックで、快適な生活への夢がある。その意味でも、毎年の自然見学校での「火起こし」は課題であった。

新冠のスタッフが、木の棒に紐を巻き、根気強く、その心棒を回転させていると、心棒の先端が焦げ臭くなり、煙を発生しはじめた。しかし、発火はしない。下に置いてある大鋸屑からも煙が出はじめ、口先を細くして大鋸屑の煙発生を中心に静かに吹くと赤い燐が見え、少しずつ風を送ると、パツと点火した。無言で汗を拭きながら見つめていた子供たちから「ウォォー」という地響きのような声がおこった。スタッフも互いに握手し、そして大きなバンザイの大合唱となった。その夜のキャンプ・ファイヤーが例年より盛り上がったのは当然である。



「火起こし」が成功した今年の自然学校

火起こし式の成功は、次の行事への弾みがつく。笹山の登山も夜の星の観測も、会員のコーラスも深い森の中へ浸透していった。そして乳呑川での化石発見が科学へのアプローチとなった。約8400万年前(恐竜時代) 上部えぞ層群乳呑川類層(中世代白亜紀後期・サンパニアン中期)という浦河スタッフの説明を、地下足袋をはいて沢に入った子供たちが、カタカナでメモをとっている。スタッフはその姿を目を細めて見ている。

自分たちでテントを設営し、柳の枝皮をむいて、パン粉と牛乳と砂糖を混ぜてねった材料を巻きつけ、炭火で焼いたパンも好評だった。

た。「ザイル」の結び方、ツリークライミング、ソーメン流し、氷水作り、タコ焼き、スイカ割りなどで交流を深めた子供たちは、ひとまわり大きく成長し、来年の再会を約束して別れた。

(新妻 徹)

熊本支部

日陰の山「小岱山」山行

とにかく、九州の夏山は灼熱の太陽に照らされて暑い。特に、今年はずっと35度を越える日が続く、しかも蒸し暑い。

『新日本山岳誌』や中央分水嶺の踏査も終わり、支部企画による登



ますます活動が充実する熊本支部。小岱山にて

平成18年度 年次晩餐会

東海支部

今年度の年次晩餐会は、初めて東京を離れて名古屋での開催となります。初の地方開催となる今年の晩餐会に向け、盛りだくさんの催しを準備しました。ぜひ受付開始時刻を目標にお越し下さい。

日時 平成18年12月2日(土) 午後2時受付開始
場所 ウェスティンナゴヤ キャッスル (ホテル)
会費 15,000円

〔講演会〕

- 1部 秩父宮記念山岳賞受賞者講演
- 2部 講師 尾上亭昇岳師による「今ナゴヤが、東海支部が元気!」

〔展示会〕

1. 100周年記念中央分水嶺踏査の記録
2. 秩父宮記念山岳賞の発表
3. 東海支部 - その輝かしき活動の概要 -

〔晩餐会における主な催し〕

オーケストラによる歓迎演奏、ローツェ BC生中継、アルプホルン演奏 など

〔ドリンクコーナー・販売コーナー〕

会場内のドリンクコーナーでおくつろぎいただきます。

また、JACグッズのコーナーでは晩餐会記念特別販売品としてストック、ピッケルに会員ナンバー、ネーム入れの予約も当日特別価格で承ります。

〔記念山行〕

12月3日(日) 2コースを予定。

1. 猿投の森〜猿投山
2. 鈴鹿・御在所山

山の楽しみと研鑽を目標にした山の登りをしようと、年間目標を掲げた。5月には、九重連峰漁師岳のオオヤマレンゲを鑑賞し、その後、筋湯温泉にて、会員5名の傘寿の祝いを行なった。皆さん山の現役として活動されており、それぞれのお話は、会員にとって示唆に富む話ばかりで、宴席も大いに盛り上がった。

8月の2回目の例会が、日陰の山「小岱山」であった。この山は県北の玉名市、南関町、荒尾市の

東西6キロにまたがる花崗岩の山だが、最高峰の筒ヶ岳(501.1m)をはじめいくつものピークが連なる大きな山容の山である。全山シヨウダイマツ、コナラ、シイ、トキワマンサクなどの大きな天然林に覆われ、野鳥も多い。この日もカンカン照りの暑い夏日だったが、登山コースはすべて、仄暗いほどの日陰の別天地で涼しく、観音岳山頂、その昔の正法寺跡の草原だけが烈日で、熊本の夏山では考えられないほどの快適な山だった。

富山湾岸からの北アルプス

佐伯邦夫著/四六判/268頁/1995円

立山、黒部、剱、白馬、毛勝など北面からの新鮮な登山紀行。

大峯奥駈道七十五靡

森沢義信著/A5判/312頁/2940円

吉野から熊野へ究極の山岳修験の山道と行場を克明に紹介。

旗振り山

柴田昭彦著/A5判/328頁/3000円

旗山、高旗山、相場振(そぼふり)山、相場山などの研究と案内。

森林はモリやハヤシではない

四手井綱英著/四六判/288頁/定価2100円

里山の名付け親・九五歳を過ぎた森林生態学者の魂の語り。

日本全国4000山の情報を網羅!

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集 日本山岳会創立百周年記念出版
 菊判(1992頁) 上製/クロス装/カバー掛け/函入り 18,900円

〒606-8161京都市東山区
 左京区一乗寺木ノ本町15 **ナカニシヤ出版** TEL.075-723-0111
 FAX.075-723-0095
<http://www.nakanishiya.co.jp/> [表示価格は税込]

熊本支部の設立は、昭和32年7月13日で、来年は設立50周年の大きな節目を迎える。盛大な記念行事も準備中だが、その一つヒマラヤトレッキングについては1年前倒して、この9月23日から実施している。9名の隊員をクレーンブ・ヒマール、およびポカラ方面に派遣して成果を挙げている。

4月以降、新入会員4名、会友2名が新規加入し、支部活動のますますの充実と発展に努めたい。

(工藤文昭)



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをごこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
 (国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
 大阪/〒540-0012 大阪府中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
 名古屋/〒464-0807 名古屋千代区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

広報委員会

第1回広報連絡会

昨今の山岳事情は、体力、経験不足の中高年登山者の増加により事故が多発し、また少子化、インターネット、携帯電話などの普及により若年層の山ばなれが進んでいるといえるだろう。日本山岳会も同様で、会の平均年齢も64歳と高齢化している。近い将来、登山界は大変難しい状況を迎えるのではないかという危機感をもっている人も少なくない。

そこで、こうした問題点や情報を、山岳関係のメディアの記者たちに提供し、意識を共有するとともに相互の情報交換を図ることを目的に広報委員会が発足した。広報委員会の構成は、田邊壽副会長、鯉坂青青、神長の3人。

第1回目の広報連絡会が、9月2日、在京の新聞、テレビの山岳

担当記者を集めて日本山岳会の会議室で開催された。テレビではNHK、TBS、テレビ朝日などから、新聞は朝日、読売、毎日、東京、共同、時事などから17人の記者が集まってくれた。

まず、田邊壽副会長から開会のあいさつと趣旨説明があり、つづいて中村吉広氏による特別講演が行なわれた。中村氏は、仏教を学ぶべく、中国の青海省にある師範専科学校へ留学。そこで、ひよんなことからチベットの学生に日本語を教えることになり、夏目漱石の『坊っちゃん』の翻訳を授業で取り上げ、訳ささせている。その模様をビデオと講演で興味深く語ってくれた。

つづいて平山善吉会長から、日本山岳会の現状が報告された。特に昨年は日本山岳会の創立100周年に当たり、いくつかの100周年記念事業があり、その説明が

あった。自然保護への取り組みとして「高尾の森づくり」や「猿投の森づくり」。また100周年記念事業として実施された「中央分水嶺踏査登山」も紹介。マナスル50周年登山や青年部のパンバリ・ヒマール登山の概要なども説明があった。山岳担当記者からも日本山岳会の現状についていくつかの質問が出て、山岳会を少しでも理解してもらおうと役立ったと思われる。

その後、集會室に場所を移して懇親会を開き、それぞれの自己紹介とともに、現在の山岳界がかかえる問題点も話され、1回目の広報連絡会は盛況のうちに終了した。なお、今後は3カ月に1回くらいは集まって情報を交換することが確認された。(神長幹雄)

海外委員会

タンザニア大使が本会を訪問

9月30日、駐日タンザニア連合共和国特命全權大使であるE・E・E・ムタンゴ氏が、通訳の水邦子氏とともに山岳会のルームを表敬訪問された。日本山岳会側



駐日タンザニア大使ムタンゴ氏(前列右)

は、神崎忠男総務委員長と貫田宗男海外委員長が応対した。

タンザニアはアフリカ最高峰であるキリマンジャロ山を有し、ムタンゴ大使はその南山麓の地のご出身だそう。大使はキリマンジャロ山を44回も登ったタンザニアの登山家、ミリシヨ・サラ・キキア將軍の友人で、この將軍は元アメリカ大統領で山好きのジミー・カーター氏を同峰に案内した、タンザニアでは著名な登山家という。

そこで大使から「両国登山家の交流を通じて日本とタンザニアの友好を図り、ひいては同国の産業の16割を占める観光業の振興に努めたい」という希望が述べられた。

そのためにまず日本を代表する登山家の団体である日本山岳会を表敬訪問したとのこと。

タンザニアははまだ国際山岳連盟には加盟していないが、サラ・キキア將軍にタンザニア人登山者の組織化、国際山岳連盟への加盟を提案することであった。来年初に松本で開催される国際山岳連盟総会に、タンザニア登山家がオブザーバーとして参加することも検討したいとのこと。

熱帯にそびえる雪をいただくキリマンジャロ、野生動物が住む大自然を旅するサファリ、さらに同地に滞在して『キリマンジャロの雪』を執筆したアーネスト・ヘミングウェイのことまで、大使は熱意をこめてその魅力について語られた。

神崎・貫田の両委員長からは日本の登山者の現状、動向の説明があり、活発な意見交換がなされ1時間の有意義な会談は終わった。お土産にキリマンジャロ・コーヒ1ならぬ名古屋のどら焼きを持参されたのは、大使の気さくな人柄を感じさせるものであった。

(貫田宗男)

学生部指導委員会

パンバリ・ヒマール初登頂

大学生を中心メンバーとした当学生会部隊が、9月27日午前9時40分、ネパールのマナスル北西に位置する未踏峰・パンバリ・ヒマール峰(6887m)の初登頂に成功した。登攀隊員5名全員が登頂した。

当登山隊は、100周年記念事業の一環として派遣されたもので、8月16日に先発隊が出国、同20日に本隊が出国した。その後、8月23日にキャラバン開始、9月6日にベース(4835m)入り、C1(9月9日)、C2(同18日)、C3(同23日)とルートを延ばし、今回の登頂を果たしたものである。

登山隊メンバーは以下のとおり。隊長・加藤好美(専修大学山岳部4年)、副隊長・小山さやか(立教大学山岳部3年)、登攀隊長・浦部陽介(中央大学山岳部OB)、隊員・中島健郎(関西学院大学山岳部4年)、小宮岳人(専修大学山岳部3年)、ベースマネージャー・須藤暢(千葉大学山岳部2年)。

(大場浩正)

医療委員会

実技講習会

「山における救急蘇生法」開催

9月3日、日本青年館において医療委員会・指導委員会共催で、実技講習会「山における救急蘇生法―AEDの使い方も覚えよう」を開催した。募集を上回る31名の講習者が参加し、朝9時から夕方4時過ぎまでの講習に熱心に取り組んだ。

藤枝医療委員会委員長のあいさつの後、野口いづみによる「山での救急蘇生について」の講義で、蘇生法の概要の説明を行なった。最後に昨年10月の山岳耐久レースで、心停止した傷病者においてAED(自動体外式除細動器)によって蘇生された1例が紹介された。その後、午前中は心肺蘇生法について、ビデオ上映と実技指導を交互に繰り返した。実技は1班6、7名の5班に分かれ、各班に恵秀彦氏ほかのインストラクターがつき、きめ細かな指導が行なわれた。救急蘇生法は2005年に大幅な改定がされ、今回はG2005と呼ばれる新しいガイドラインに

沿ったプログラムで行なった。

新ガイドラインでは胸骨圧迫心臓マッサージが重視されており、実技もまず胸骨圧迫実技から入る点が目新しかった。次に、気道確保と人工呼吸の実技を行なった。人工呼吸はうまく入らなかつた場合や、感染の危険がある場合にはそれ以上行なわなくてもよくなつた。うまく吹き込めずにあたふたしたり、口対口による人工呼吸を逡巡することで、時間を無駄に費やすよりは、一刻も早く心臓マッサージを開始することが必要だからである。従来、心臓マッサージ

エベレスト街道の高品質のロッジに泊まる
シャンボチェ・パノラマ・ホテルにも2連泊

エベレスト展望ロッジ滞在ゆったりトレッキング12日間

●出発日(旅行代金)

①12/22(¥398,000) ③3/18(¥398,000)

②3/4(¥398,000) ④4/8(¥398,000)

お申し込みはお早めに

国土交通大臣登録旅行業第490号/社団法人日本旅行業協会正会員
 **アルパイン ツアーズ サブス 株式会社**
 〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
 大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
 e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

と人工呼吸の比は15対2だったが、今回のガイドラインでは30対2になり、心臓マッサージの回数が増えた。午前中の講習の最後に異物除去実技を行なった。異物除去は簡略化されて、わかりやすくなった。

午後の実技はAEDの実際の使用手順について行なった。救助者がAEDの電極を傷病者の胸部に貼付すると、AEDが心電図を解析して電気ショックが必要かどうか判断してくれる。電気ショックが必要ならばボタンを押すように指示される。電気ショックが一刻も早く行なわれることが蘇生に重要なので、意識不明者を発見した場合には、最初に救助を呼んで迅



心肺蘇生の講習が熱心に行なわれた

速にAEDを現場に持ってきてもらうことが必要である。受講生は迫真の演技で、救助を呼び、AEDを持ってくることを指示し、実習室はにぎやかな声と熱気に包まれた。

その次に、シナリオトレーニングを行なった。たとえば、「北アルプス涸沢周辺、9月初旬、14時ごろ、ヒュッテ近くで2人パーティのうちの32歳男性が不調を訴えた後、意識を失い、倒れてしまった。近くに別の登山グループがいた。山岳警備隊詰め所にはAED設置済み」という状況設定をして、「同行者」である講習生にどのようにしたらよいか、心肺蘇生の手順を実際にやらせるという実技であった。臨場感があふれ、一段と熱心に講習が行なわれた。

さらに、応急手当の概要について説明が行なわれた。また、質疑応答ではアナフィラキシーショックへの対処などについても、活発な質問があった。最後は、黒川指導委員会委員長から、講習生へ、「今後の山岳救助における活躍を期待する」旨、あいさつがあり、修了証が講習生に授与された。

AEDは今後、救急蘇生に欠く

ことができない器具であり、多くの登山者が救急蘇生実技講習会でAEDの使い方を学ぶことが望まれる。本講習会が山中の突然死を防ぐうえで役立てば幸いである。

(野口いづみ)

新土曜会

「山の古典を読む会」

7月27日、山岳会集會室において「山の古典を読む会」を開催した。初めての試みであったが、新土曜会会員外の方も含めて15名の参加があり、好評であった。演者は松丸秀夫氏、講読書は『エンデューアランス号』、著者キャロライン・アレグサンダーによるアーネスト・シャクルトンの南極探検記録である。

実のところ本書は山の古典というわけではない。南極大陸横断を目指して出発した探検隊であるが、南極大陸に上陸すらしていない。だが、松丸氏は語る。今、アルピニズムは探検の要素を失って行き詰まりつつあるが、90年前の探検の記録が数年前に出版されて、現代の私たちの心を揺さぶる。つまり、ロマンチズムとヒロイズム

は登山と探検に共通する原点であり、登山に必要なエッセンスでもある。本書は優れたエンターテインメントであるばかりでなく、読者を楽しませるサムシングがある。演者松丸氏は旧制高校において、シャクルトン探検隊員の一人、オードリー少佐から英会話の授業を受けたという(村山雅美氏も高師付属でオードリー少佐の薫陶を受けたということである)。探検の歴史上の生証人が、現代にまだつながっているということである。

シャクルトン探検隊出発の3年前に、アムンゼンが南極点に初到達した。1週間遅れてスコット隊も南極点を踏んだが、帰途全員死亡した。シャクルトンの探検隊は船を失い、南極横断の計画が不可能となったときに、今度は全員無事に生還することが目的となった。そして流水に乗って漂流し、最後は救命ボートで28名の隊員全員が2年の後に生還する。それはシャクルトンの統率力と探検隊員の団結力、不屈の闘志、そして優れた航海術に由来するものである。数多く出版される類書のなかにあつて、本書は私たちにロマンを与えてくれる一冊である。(箕岡三穂)

Climbing & Medicine · 57

ステロイドが高所脳浮腫に 著効を示した一例

上小牧 憲寛

2006年5月17日、栃木ヒマラヤ研究会のメンバー4人がエヴェレストに登頂しました。しかし、45歳のサーダーが最終キャンプ(C3)まで自力下山できませんでした。彼は翌日の夜明け前、他隊に発見され、C3に下ろされました。ふらふらと立ち上がりましたがよるめいて歩けなかったため、18日のうちにC2、C1を通り越して前進ベースキャンプ(ABC)まで下ろされました。

19日朝、ABCで私が診察しましたが、呼吸音は正常で動脈血酸素飽和度(SpO₂)が71%あり、高所肺水腫ではなく高所脳浮腫が疑われました。高所脳浮腫にはステロイドであるデキサメサゾンが特効薬ですが、私は日本に置き忘れてきてしまい、まだ手元に届いていませんでした。もう自分では立つこともできなくなっており、その日のうちにベースキャンプ(BC)に下ろされました。そこでなんとデキサメサゾンがコックのテントの中に放置されていたことが判明しました。しかし、注射器と針はABCに置いてきたので注射できませんでした。

20日朝4時にBCを車で出発しましたが、7時に

突然全身けいれんを起こしました。症候性てんかんです。けいれんが治まらぬまま、7時半にティンリに到着し、注射器と針を手に入れることができました。厚着のため前腕の皮膚をうまく露出できず、1本目のデキサメサゾン8mgを皮下注射し、2本目は静脈内注射することができました。すると約10分でけいれんが治まり、意識も回復しました。しかし、左半身は全く動かすことができませんでした。

カトマンズに搬送し、撮影された頭部CTと頭部MRIで脳浮腫を示す所見がみられました。入院後、病状は劇的に回復し、10日弱で歩くことも左手を使うこともできるようになりました。

高所脳浮腫の治療の基本は、まずできるだけ低いところへ患者を下ろすことで、可能ならば酸素や携帯式高圧バッグ(ガモウ・バッグ)を使うことが有効です。さらに、強力な副腎皮質ステロイドのデキサメサゾンは、血管新生を促進し毛細血管基底膜の透過性を増加させる血管内皮成長因子(VEGF)を抑えるために、浮腫を軽減させる効果があるとされ、有効と考えられます。今回は注射薬しか用意していませんでしたが、内服薬も持参する必要があったと反省しています。

本症例でデキサメサゾンが奏功したのか、偶然だったのか、十分明らかではありませんが、竹内洋岳氏も高山病で重篤な状態だった折に、デキサメサゾンが劇的に奏功した経験を有しています。このような状態では投与が試みられるべきだと考えられます。

タンザニア キリマンジャロゆったり登頂とサファリ12日間
～山麓の空へ乗り入れ～ 2月10日発 ¥598,000



ウフルピーク5895m(左)と火口水河

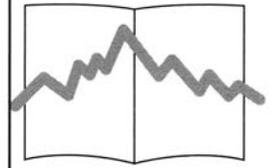
Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員

〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

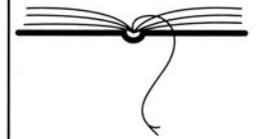
『日本山岳会百年史』の配布に
ついで

『日本山岳会百年史』の編纂作業は、年内の完成を目指して最終段階にかかっております。「本編」および「続編・資料編」二冊セット、各A5判・上製本、計約800ページとなる見込みです。

出上来が次第全会員あて発送いたしますが、不要の方がおいででしたら予め事務局に葉書で申し出て下さい。



図書紹介



藤田弘基・著

『ヒマラヤ百高峰
標高7000メートルを超える
氷雪の山々』



2006年4月
平凡社刊
A4変型横判
(220×300^{mm})
144^頁 3990円

今年5月、マナスル登頂50周年を記念して、著者・藤田弘基さんの写真展「マナスルを巡る」が東京・新宿のペンタックスフォーラムで開かれた。写真展にちなんで上梓されたのが『ヒマラヤ百高峰』である。ひとくちにヒマラヤといっても、東は中国、ナムチャバルワから、西はアフガン、ヒンドウクシユを含めると全長35500^{km}に及ぶ世界の屋根である。そこには8000^m級の巨峰が14座、7000^m級の高峰となると数百座が

ある。

本書は、副題にもあるように「標高7000^mを超える氷雪の山々」の中で「百峰」を厳選して紹介するもので、ヒマラヤという過酷な条件下に、妥協を許さないプロ作家の視点で捉えた作品集である。

1956年、日本山岳会隊のマナスル初登頂は、当時高校生であった著者のヒマラヤへの思いを完全に高揚させた。1966年、念願が叶ってヒマラヤ行きが実現、その時、「全ヒマラヤを撮ることをライフワークにしよう」と決意した。

以来40年、本書にあるように、中国、チベット、ブータン、ネパール、インド、パキスタンなどの大ヒマラヤを何度も訪れ、さまざまな角度から撮影する。

現場では「ヒマラヤをより荘厳に表現するために、目的の山の対

斜面に1^mでも高く登り、至近距離で撮影するように心がけた」と後書きで述べている。その成果は著書の随所で見ることができ、

聳え立つ氷壁の岩峰、切り立ったヒマラヤ壁、千変万化する雲の動き、黎明や夕暮れに染まる山々、それらは荘厳であり、神秘的で美しい。季節、撮影地、時間で変化するのが山の表情。それらを的確な構図で見事に切り取っている。しかも撮影のほとんどは、大型カメラ。その繊細な描写力は見る者の心に迫ってくる。

著者は、ヒマラヤを撮って今年で40周年の節目を迎えた。これからの活躍がいつそう期待される。巻末の「ヒマラヤ撮影巡歴」では、収録写真の1点1点を解説、

記述された文章からヒマラヤへの造詣の深さを感じることができ、また、ヒマラヤを撮った撮影機材などを披露しているので、山岳写真愛好者には参考になる。

なお、1966年刊『ヒマラヤ名峰事典』(葉師義美・雁部貞夫／編)の写真は、藤田弘基撮影によるものである。

(羽田栄治)

『南の探検』



2006年3月
平凡社刊
文庫判 481^頁
定価 1785円

蜂須賀正氏・著

さらりと書き綴られた文章が、内容の豊かさとともに読者を飽きさせることがない。

本書は太平洋戦争の半ば(昭和18年)に刊行された本の復刻であるが、その内容となっているのは、それからさらに14年前(昭和4年)に行なったフィリピン・ミンダオ島のアポ山への探検旅行が縦糸になっている。

著者は旧阿波藩主・蜂須賀家の子孫で、青年時代英国留学し、国際的な教養を身につけた世界的な鳥類学者である。

綴られている内容は海洋、山岳、気象、動・植物、原住民、民族など多方面にわたっている。また地域的にもボルネオ、セレベス、ニューギニアなど隣接する地域からの話題も交えている。南の海洋に行く船の談話室で、著者の新鮮な話題に耳を傾けているかのよう

ある。

探検記といえはとかく特定の分野に主眼をおいた断片的な内容になりがちである。鳥類学を専門とする著者ではあるが、その取材と考察は前記のとおり非常に多面的である。随所に引用している人物や文献からも著者の幅広い博物学上の知識の豊かさを読みとることができる。大変興味深く面白い内容の連続で、クラシックな探検記の原形にふれる思いがする。一読を勧めたい。

また挿入されている多くの珍しい図版や、巻末の丁寧な注釈が本文読解の一助になっている。

(松家 晋)

京大探検者の会・編

部創設50周年記念出版
『京大探検部』1956〜2006』



2006年3月
新樹社 511頁
四六判 2940円
定価

バイオニアワークという言葉が熱く語られた時代があり、本多勝一氏を中心に京大探検部が活躍を

したことはよく知られていることである。本書はその大きな足跡を振り返り、50年を回想する大著である。

1955年秋から始まったアルピニズムなのかバイオニアワークなのかという激しい議論を経て、翌年3月探検部は誕生する。

第1部では京大探検部の独立と誕生、初めての海外遠征成立の経緯が詳細に語られる。

その後、危機を乗り越え次々と海外に出かけていく。彼らは、なぜ海外遠征を志したのか。第2部ではそれぞれの時代の探検が語られる。現代の探検を模索した石

毛氏のトンガ遠征・瀬戸口氏のニューギニア隊など、その成立過程や探検部の雰囲気、教授と学生の熱気溢れる関係はまことに興味深い。そこには大陸派と水理派があり、地理的探検の舞台だったヒマラヤも太平洋の島々もシルクロードをも含み、国内海外を問わず、何をしたいのか、どういう成果が得られるのか、そのための組織論が議論され行動に移される。

その結果として民族学・人類学など多くの学術的探検記録が残されることになった。これを支えた

のはいうまでもなく今西・梅棹と言った錚々たる学者に、政財界人であり何より意気盛んな学生自身であった。

第3部の各世代の回想では、その後の人生に探検部から得たことがその人の糧としてずっと生き続けていることを読むことができる。

私見だが、これらの方法論・組織論・実践論は、やがて朝日講座『探検と冒険』全8巻に結実したのだと思う。

本書は、チェリー・ガーランドの言う「探検とは知的情熱の肉体的表現である」ことを身をもって示した者たちの記録である。今の若い人達は、海外遠征は「国を出れば半ば成功」と言われた時代には無縁の、個人としてのバイオニアワークを追求実践している。彼らは、本書に未知への憧れと夢が何らかのカタチに結実して誕生する、小さいが偉大な組織の物語を読むことになるであろう。

好著だけに高価なのが惜しまれ
(編川祥夫)

図書受入報告 (2006年9月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
吉川信市	我が青春の山日記	45pp/26cm	吉川信市(私家版)	2006	著者寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2006——全日本山岳写真展作品集	220pp/22cm	全日本山岳写真協会	2006	清水正己氏寄贈
宇都木慎一	三峰山脈から台高山脈へ	37pp/26cm	宇都木慎一(私家版)	2006	著者寄贈
6.25シンポジウム実行委員会(編)	自然エネルギーと私たちの未来(シンポジウム報告書)	35pp/30cm	6.25シンポジウム実行委員会	2006	発行者寄贈
立山カルデラ砂防博物館(編)	異人たちが訪れた立山カルデラ	211pp/27×34cm	立山カルデラ砂防博物館	2006	発行者寄贈
武蔵野第三中学校山岳部OB会(編)	武蔵野第三中学校山岳部小史	55pp/26cm	武蔵野第三中学校山岳部OB会	2006	発行者寄贈
エリカ・コシ(著) 堀方郁映他(訳)	あるクライマーの生涯(The Mountains No.13)	287pp/21cm	二見書房	1967	訳者寄贈
松本徑夫	幻の楼蘭 ロブ・ノールの謎	461pp/22cm	権歌書房	2006	著者寄贈



9月理事会

日時 9月13日 18時30分～20時

10分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】平山会長、平林・橋本各副会長、吉永・賛田・石田・篠崎・野口・斎藤・藤井・石橋・古野各理事、山本・竹中各監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】田邊副会長、大蔵・渡邊各理事

●議事に先立ち、平山会長より、いよいよ本年度も後半に入った。未だ多くの懸案事項が残っているので、実行・実現に向け理事各位の一層の努力をお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

1 中央分水嶺踏査事業について

●未踏査部分の踏査計画

創立100周年記念行事実行委員会・中央分水嶺踏査委員長の石田

理事より現状報告があり、2区間の未踏査部分については、来る2月中旬開催のフォーラムまでを目途として踏査すべく最大限の努力をするとの報告があった。

●報告書の発行

A4判、横書きとして2000部を発行することとし、既に発注先の技報堂と協議を開始した。

(承認)

2 北海道支部「中央分水嶺踏査記録集」発行に対する助成金申請について

「記録」の発行経費75万円、「余話・秘話」の発行経費60万円であるが、1132^キという本邦最長の踏査を完遂した支部であることから「記録」の発行経費の半額を最低として100周年特別会計より助成することとした。なお、参加支部員以外の会員への配布については有料とすることが望ましい旨伝えらることとした。

3 委員会委員の公募構想について

(承認)

出来得る限り多くの会員が委員会活動に参加し、会の活性化を図る観点から構想されたものである。担当の斎藤理事より現状の報告と今後の進め方等についての説明があった。今後、各委員会への説明を実施して委員会の反応を見極めた上、各支部への連絡等も行い、具体化の可否を含め検討することとした。

(継続)

4 放送大学：講座への協力依頼

放送大学の「NPOマネージメント講座(07)」より、公益法人活動等に関しての協力依頼があった。今後の公益法人としての活動に有用と考えられるため協力することとした(担当：篠崎理事)。(承認)

(承認)

5 電源開発(株)宛：資金援助依頼の発出について

科学委員会が実施している「マッキンリー気象観測」プロジェクトに対する2006年より4年間、年間100万円の資金援助依頼。依頼文書の名義及び援助金の受領方法について不明な点があるため、早急にかこれらを明確にした上、使途についても説明を求めることとした。(承認)

6 NPO法人「ヒマラヤ保全協会」：募金依頼

(承認)

ヒマラヤ森林保全のための募金依頼。本会の過去の募金活動を参考として1万円を協力することとした。

7 (株)アイ・ヴィー・シー：映画『星と嵐』他2本のDVD化に伴う名義協賛

ガストン・レビュファ監督の3部作のDVD化への名義協賛。羽田資料・映像委員長も内容、実施会社等信用あるものとしており協賛することとした。(承認)

【報告事項】

1 平成18年(第8回)秩父宮記念山岳賞推薦状況(吉永)

京都支部・高村会員他より国立民俗学博物館教授 山本紀夫氏の「アンデス・ヒマラヤにおける高地民族の山岳人類学的研究」に対する推薦があった。10月及び11月に開催の審査委員会に付議することとした。

2 首都圏の支部化について(平林)

支部化促進委員会において検討中。栃木に設立気運の高まりがみられ、千葉にもその意向が感じられるため応援することとしている。

また、東京についても一部にその意向があるため、区割り等について今後議論することとしている。

3 海外登山長期計画について

(橋本)

去る8月31日、担当の橋本副会長及び重廣常任評議員が訪中、張江援中国登山協会副主席(西藏自治区体育局副局长)・趙建軍(中国交流部)と計画推進のため非公式に協議した。特に、カンリ・ガルポ山群、サンルン及び梅里雪山の入城・登山許可の可能性について話し合いをした。なお、カンリ・ガルポ山群の一部の山については、従来から遠征を実施している大学より引き続き遠征隊を送りたい旨連絡があり、当会としては十分配慮するよう申し合わせた。

4 第1回広報連絡会開催(田邊)

9月2日に開催。新聞等9社、17名の記者が出席された。今後も継続して実施する。

5 学生部「パンバリ・ヒマール遠征隊」状況報告(吉永)

8月16日先発隊・8月20日日本隊出発、9月6日ベースキャンプ着で全員元気で活動している。

6 日本・ネパール国交樹立50周年記念展覧会(田邊)

9月16日〜18日、アキバコンベンションホールにて開催。本会もマナスル初登頂50周年のため関連資料を提出した。

7 「アテネ書房」倒産について

(吉永)

7月12日、法的整理が開始され倒産した。本会としての未収債権の在否について早急に調査する。

8 ヒマラヤ映画祭実施報告

(吉永)

8月14日〜22日、NHKふれあいホールで開催された。本会の「マナスルに立つ」等16作品が上映され、延べ1848人の入場者があった旨、主催者のNHKインターナショナルより報告があった。

9 年次晩餐会の実施要領について(吉永)

来る12月2日(土)、午後3時より

名古屋において東海支部所轄で開催する。内容、宿泊、記念山行の概要について報告があった。次回理事会上に詳細な計画を提出予定。

10 医療委員会主催・講演会の実施報告(野口)

9月5日、講演会「中高年登山者の注意点」(講師：松林京大教授)を京都にて開催。1000名以上の参加者があった。

11 医療委員会・実技講習会の実施報告(野口)

9月3日、実技講習会「山での救急蘇生法」を日本青年館にて開催。31名の参加があり、好評であった。

12 その他

(1)タンザニア大使来訪について
キリマンジャロ登山についての宣伝等のため来訪する旨の連絡があった。海外委員会にて対応。
(2)京都支部会員の遭難事故について

9月3日、奥美濃・三國岳にて京都支部の朝倉英子さんが事故死されたとの報道あり。

13 7月度入会者

17名

ルーム日誌 9月

- 2日 広報委員会
- 4日 総務委員会 科学委員会
- 5日 アルパインスケッチクラブ
- 6日 事業委員会 自然保護委員会 山岳地理クラブ
- 7日 フォトビデオクラブ
- 8日 海外委員会
- 11日 総務委員会 アルパインスケッチクラブ
- 12日 二火会 アルパインスケッチ

チークラブ
13日 理事会 休山会 山想倶楽部

14日 山の自然学研究会 山遊会
19日 百年史委員会 資料映像委員会 インターネット小委員会

20日 三水会 つくも会
21日 科学委員会 アルパインスケッチクラブ

22日 中央分水嶺委員会 緑爽会
26日 高尾の森実行委員会 00会
27日 常務理事会 指導委員会 ゆきわり会 麗山会
28日 自然保護委員会 支部化検討委員会 中央分水嶺委員会 山遊会

9月来室者497名

会員異動(9月)

物故

- 三枝明徳 (6599) 06・7・30
- 朝倉英子 (9799) 06・9・3
- 石田国夫 (4163) 06・9・19
- 森川洋佑 (6288) 06・9・21
- 大井正一 (4148) 06・9・25

退会

- 渡邊昌一郎 (5200) 宮城
- 緒方路子 (13826) 宮崎
- 終身会員 小島 甫 (6080)

**平成18年度「海外登山基金助成登山計画」募集
海外登山基金委員会**

日本山岳会は優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。これまで48の登山隊に対し、2760万円の助成を行なってきました。

18回目となる今回も、ユニークな登山計画を支援したい、と考えています。会員資格や単独、パーティ等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

対象 平成19年2月1日～平成20年1月末に海外の山へ出発する登山隊

申込方法 所定の様式(事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。

申込締切 平成18年12月31日

審査と助成期間 平成19年1月中旬に審査、2月の理事会で決定、助成。なお、対象となった登山隊は後日、登山レポートの提出を必ずお願いします。

助成金総額 160万円

会場	時間	会期	昭 和 3 6 年 か ら 続 いた ライ チ ヨ ウ と 博 物 館 の か か わ り を ま と め、 生 態 と 飼 育 を テ ー マ に 展 示 を 行 な い ま す。
市立大町山岳博物館	午前9時～ 午後5時 (入館は午後4時30分まで)	10月1日～ 11月26日	大町山岳博物館

◆「上高地山研」今年も年末年始オープンします 山研運営委員会
建物の維持管理に委員が山研に駐在しますので、会員は宿泊できません。仮設の排水使用ですので食事は委員が用意し、トイレも仮設します。正月の山研、どうぞご利用下さい。

◆企画展「ライチヨウの生態と飼育」
大町山岳博物館
昭和36年から続いたライチヨウと博物館のかかわりをまとめ、生態と飼育をテーマに展示を行います。
期間 平成18年12月30日から翌年1月3日まで(の予定)
申込 11月末までに坂本正智宛て(TEL・FAX 0421373132338)折り返し詳細を送ります。

INFORMATION

インフォメーション



● **さんけん通信** ●

「美しい上高地」を「美しくする会」

山研管理人 内野かおり

隔週水曜日の朝9時、河童橋のたもとに緑色のジャンパーを着た人々が集まります。ゴミ袋とゴミバサミを手にした30人ほどの集団は、梓川の右岸と左岸に別れ、大正池までの道をゴミを拾いながら歩きます。昭和38年から続く「上高地を美しくする会」の活動の一端です。

「上高地を美しくする会」は上高地のホテル、旅館をはじめ、タクシーやバス会社、遠く涸沢や槍ヶ岳方面の山小屋に至るまで、多くの団体が加入し、山研もその一員になっています。

9月の最終水曜日、年に一度の清掃登山がありました。今年の行き先は徳本峠、2歳の娘も一緒に家族総出で参加しました。といっても娘は「父ちゃんタクシー」と呼んでいる背負子に乗って、へばる母ちゃんに声援を送る役目です。

雨具とお昼のお弁当を持って、いつもより30分早い8時半に集合です。ゴミ拾いが目的とはいえ、他の施設の方々と一緒に山に登るのは、気分も高揚します。点呼をとって、さあ出発。

ゴミを拾っていると、よく目につくのは3種類あります。

まずクッキーや飴の小袋。最近の菓子は個包装化が進んで、口に入れる前に、まず袋を破る必要があります。その袋、特に破った切れっ端が土にまみれて落ちているのです。歩きながら口に入れる時にうっかり落としても、「ま、いいか」と思ってしまいがちなのかもしれません。

次にタバコの吸殻。私はタバコを吸わないので、これがうっかり落ちるものなのかどうかわかりませんが、その数からすると「うっかり」の頻度よりも多い気がします。

そしてトイレトペーパー。これは言わずと知れた……です。上高地から明神までは3^{キロ}、緊急事態には長い距離です。散策路からすぐの茂みにトイレトペーパーを見つけると、他人事ながら、誰かに目撃されなかったか心配になります。「本体」は自然に還っても、紙だけ長く残ります。その証拠に動物のものはあつという間にわからなくなります。「ゴミの持ち帰り」は常識になりましたが、使用済みのトイレトペーパーも、という意識が根づくのには時間がかかりそうです。

そうして、たどり着いた徳本峠でお昼を食べて解散し、皆、下山後は仕事に戻ります。ゴミを拾ってきた道を戻りながら、先日聞いた言葉が心によみがえりました。

『「美しくする会」の発展は望まない。ゴミ持ち帰りが徹底され、この会の活躍の場が減っていくことを願う』

特別展示室・ホール
入館料 通常入館料金(大人400円、高校生300円、小中学生200円)

* 常設展示と共通。団体割引あり。

◆ **山の古典を読む会 新土曜会**

日時 11月30日(木)午後3時～5時

場所 山岳会集会室

講演者 古市進会員

書名 『ヒマラヤの男』

著者 テンジン・ノルゲイ

述 J・R・アルマン記

訳者 井上勇

『わが山エヴェレスト』

著者 テンジン・ノルゲイ

述 M・バーンズ記

訳者 吉永定雄

申し込み不要

日本山岳会会報 山 737号

2006年(平成18年)10月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社